

Hardy の “Had You Wept” における仮定法の意義 — Bécquer の詩との対比において

神 崎 謙 一*

On the Role of Subjunctive Mood in Hardy's “Had You Wept”: In Comparison with a Poem of Bécquer

Ken-ichi KANZAKI*

(Received October 29, 1996)

Hardy の多くの恋愛詩がそうであるように、“Had You Wept” も、伝記的にどの女性との関係を歌っているのか、つまり作中の “you” が誰なのかということが詮索されてきた。一般論をいえば、作品と作者の実生活の関係を追うことは作品の理解に益するとは限らず、解釈にバイアスをかけ、テキストの自立性を奪ってしまうことが多い。しかし Hardy の場合は、たとえば第1詩集の PREFACE で “The pieces are in a large degree dramatic or personative in conception; and this even where they are not obvious so.” と自ら記しているように⁽¹⁾、作者 Hardy と詩の narrator が意図的に微妙な距離で重なり合わされており、それが研究者に伝記的事実の援用を促す要因となっている。中でもこの作品は相手の女性を特定するための論議が盛んで、Weber の Emma 説に始まり⁽²⁾、Evelyn Hardy の Florence Hardy だろうという指摘⁽³⁾、Deacon の Tryphena Sparks 説⁽⁴⁾など多くの言説がなされてきた⁽⁵⁾。その中で注目すべきなのは K. G. Wilson による Florence Henniker から贈られた訳詩との関連性の指摘と、それを受けた Seymour-Smith の考察である⁽⁶⁾。

Wilson は、“Had You Wept” が、スペインの詩人 Gustavo Adolfo Bécquer (1836-70) の詩、より正確に言えば Henniker 夫人によるその英訳を source にしていることを明らかにした。1893 年 6 月、Henniker 夫人は、当時彼女に恋心を寄せていた Hardy に三つの訳詩を書き送った。ドイツの詩人 Lebrecht Drèves の “An Autumn Lyric”、Théophile Gautier の “Affinités Secrètes”、そして Bécquer の *Rima* (1871) からの一編である。Bécquer はスペイン・ロマン派で最も高く評価されている詩人で、同時にモダニズムの嚆矢としても位置づけられている。ほとんど無名のまま早世した Bécquer は、死後に詩集が出版され、1893 年当時、英国では海外文化に関心を持つ一部の人に知られているだけの存在だった。

“Had You Wept” が Henniker 夫人の訳詩を基にしていることは、以下のテキストを見れば疑問の余地はないだろう。

*岡山大学環境理工学部

We were together, — her eyes were wet,
 But her pride was strong, & no tears would fall;
 And I would not tell her I loved her yet,
 And yearned to forgive her all!

So, now that our lives are forever apart,
She thinks — ‘Oh! Had I but wept that day!’
 And I ask in vain of my lonely heart—
 ‘Ah! Why did I turn away?’⁽⁷⁾

この事実を根拠に、Wilson は “you” は Henniker 夫人であると述べているが、この点に関しては Seymour-Smith の Emma であるという解釈のほうが妥当であろう。しかし、詩の理解にとって重要なのは作品としての source との関係である。和歌の世界には「本歌取り」の伝統があるが、source のある歌は本歌からの位置や距離を測ることで独自に獲得したものが測られ、本歌との間にある空間が詩的内実となる。“Had You Wept” の場合、Bécquer の詩を読者が周知していることを前提にしてはいないので同じようには扱えないが、或る source を Hardy がどのように modify し、vary したかを探ることで、Hardy の詩の資質や特性はより明らかになるはずである。

*

恋愛の或る局面で女性が涙を流していたらその後の二人の関係は変わっていただろう—これが Bécquer の詩、そして当然 “Had You Wept” が扱っているテーマである。日常の中でよく耳にするような陳腐なテーマで詩をつくることには大きな危険がともなう。先の Bécquer の詩は、素人の翻訳なので言葉や音の質は問えないが、内容だけを見ても folk song の域を出ていない。Hardy は同じテーマをどう処理したのか、テキストを追いながら検証していこう。

HAD you wept; had you but neared me with a hazed uncertain ray,
 Dewy as the face of the dawn, in your large and luminous eye,
 Then would have come back all the joys the tidings had slain that day,
 And a new beginning, a fresh fair heaven, have smoothed the things awry.
 But you were less feebly human, and no passionate need for clinging
 Possessed your soul to overthrow reserve when I came near;
 Ay, though you suffer as much as I from storms the hours are bringing
 Upon your heart and mine, I never see you shed a tear.

The deep strong woman is weakest, the weak one is the strong;
 The weapon of all weapons best for winning, you have not used;

Have you never been able, or would you not, through the evil times and long?
 Has not the gift been given you, or such gift have you refused?
 When I bade me not absolve you on that evening or the morrow,
 Why did you not make war on me with those who weep like rain?
 You felt too much, so gained no balm for all your torrid sorrow,
 And hence our deep division, and our dark undying pain.⁽⁸⁾

Hardy の作品の一つの特徴は detail の巧みな使い方である。詩は“Had you—”を二度繰り返して始まり、1 行目の後半から 2 行にかけては相手の女性のうるんだ目の様子が子細に描写される。冒頭の仮定法の反復も、目の様子の過剰なまでの修飾も、個々に見れば稚拙な手法である。しかし、心情の直截な表出の後に目という局所の長い描写が続くという流れは、読者の意識にその女性の存在を引き寄せ、同時に女性への narrator の思いの深さを印象づける。その中で、2 行目始めの“Dewy as the face of the dawn”という句はイメージの形成のうえで効果的なはたらきをしている。比喩でありながらも、まだ具体的な時や場所についての叙述がないうちに現れるため、この句が情景を作り上げてしまうのである。Bécquer の詩が心情の吐露に終始し、イメージを喚起する object を欠いているのとは大きく異なっている。

3-4 行は 1-2 行の条件節に対する帰結となっているが、ここでも detail が通俗に堕しがちなテーマを詩的な領域に引き上げている。“Would have come back all the joys”や“a new beginning, a fresh fair heaven”などは抽象性と陳腐さにおいて危険がともなう表現である。それを“the tidings had slain that day”が救っている。“the tidings”とは何なのか、“that day”とはいつなのか、明らかにされないうち。ただようのは privacy の香りである。当事者には分かることが秘されている感じが、monologue のリアリティーを濃くし、ある種の切実さを読者の心に生じさせる。同時に、この具体的でありながら内容が隠された表現は drama の雰囲気を高める効果も生んでいる。時間的な要素が導入され、二人の関係が奥行きをもって立ち現れるのである。drama の有無も Bécquer にはないものとして挙げられる一つの特質である。

5-8 行では現実に起こったこと、そして narrator の女性の性格や心理に対する解釈が直接法で語られる。この部分は相手への主観的な非難に終わらない屈折した内容をもっている。“less feebly human”、“no passionate need”等の言葉で女性の性質を negative に描く一方で、“though you suffer as much as I”と相手の心情を理解する narrator の姿をも映し出している。無論 Bécquer にはこのような心理描写はない。

9-10 行はほとんど clichéだが、それに続く自問は、第 1 連後半に続いて Hardy の人間観察が小説的手法で表現されており、陳腐なテーマを詩に高めている部分である。注目すべきは 13 行目である。一連の monologue は表面的には narrator が相手の態度を斟酌しているように書かれているが、“I bade me not absolve you”という節には自身に対する客観性が現れている。Bailey はこの詩に“The poem also indicates a feature of Hardy’s personality: when resisted, he was quietly stubborn, but when he was conscious of giving pain to others, he was quick to yield.”というコメントを加えている⁽⁹⁾。重要なのは、自己を相手と同じように客観的に叙述する詩行が現れることで、詩にメタ・レベルの視点が生ずる

ことである。詩自体が、一方が他方について歌っているものではなく、双方ともが客体として歌われるものに変容するのである。

15行目では再び女性の心理についての解釈が記されるが、“You felt too much...”は第1連の“less feebly human”等の独善的な判断に較べて、はるかに相手の立場に寄り添ったものになっている。そして、最終行は完全な文とはならず、名詞句の投げ出しで終わる。この結び方は和歌や俳諧における「体言止め」のような効果を上げている。“Had you...”の反復で narrator の心情を前面に出して始まり、自問を長く繰り返した後にふっと置かれた終行には、諦めにも似た静けさがある。

全体をとおして見ると、Bécquer の詩が lyrical であるのに対して、“Had You Wept”は多分に散文的、小説的である。この詩は Hardy の作品の中でも1行の音綴数がかなり多い。その長い行の中で繰り返された monologue が続くので、narrator があたかも作中人物のような印象を与え、それが、先に述べた認識における自己の客体化と相まって、表面的なレベルにとどまらない作品世界を作り上げている。

*

narrator の主観のレベルではなく、narrator をも客体化して読んだ時に、この詩から立ち現れるものは何だろう。

narrator は“Had you wept”という仮定を何度か形を変えて繰り返し、その帰結は“would have come back all the joys”となっている。果たしてこの二つの節は本当に結びつくのだろうか。あるいは、narrator は本当にそう思って語っているのだろうか。読む者に伝わってくる印象は否定的である。narrator は「あの時君が泣いていれば」という願望を繰り返す一方で、“such gift have you refused”という言い方までして相手の女性が性格的にそうはしない女だということを語っている。同時に、自分が、相手の気持ちが分かっているにもかかわらず自ら手を差し伸べる人間ではないことも認めている。万が一、“that evening or morrow”と示されている一夜にその女性が涙を見せたとしても、この二人に“a new beginning, a fresh fair heaven”が訪れたとは考え難い。不和のきっかけになるような出来事は日常にあふれており、或る一時をしのいだとしても、遅かれ早かれ軋轢が生じるのは容易に推測できるからである。narrator 自身、11行目で“Have you never been able, or would you not, *through the evil times and long?*” (イタリックは神崎) と言っている。女性は、或る重要な局面で涙しなかったのではなく、どんな時でも泣けなかったのである。そして narrator は常に、弱さを見せられない相手に対し強硬な態度を崩せなかったのである。無論 narrator は誰よりもこういう事情をよく理解している。相手と自分の性格から、二人の間の亀裂は避け得ないものだったということを narrator は知っている。それを承知しながらなお“Had you wept”と歌っているのだ。これは Bécquer の詩と根本的に異なる要素である。

この詩に現れるのは、実現し得ない仮定を歌い、不可能な願望を歌う男の姿である。相手に求めるばかりで自らは譲ることができない、にもかかわらず知性は経緯を認識している、不如意でわがままな男の姿である。Hardy は、“Had you wept”において、lyric の形をとりながらその中に近代的なリアリズムを内包させ、屈折した人間の姿を描き出すことに成功している。

(了)

Notes

- (1) James Gibson, ed., *The Variorum Edition of the Complete Poems of Thomas Hardy* (London: Macmillan, 1978), p.6. (以下 *VCP*) .
- (2) Carl Weber, *Hardy of Wessex* (New York: Columbia University Press, 1940), p.170.
- (3) Evelyn Hardy, *Thomas Hardy: A Critical Biography* (London: Hogarth Press, 1954), p.299.
- (4) Lois Deacon, *Cross-in-Hand*, unpublished typescript, p.25.
- (5) 他に Robert Gittings は Florence Hardy 説、Trevor Johnson は Emma 説、F. B. Pinion はその双方を支持している。
- (6) Martin Seymour-Smith, *Hardy* (London: Bloomsbury, 1994), pp.482-83.
- (7) Seymour-Smith, p.483.
- (8) *VCP*, p.380.
- (9) J. O. Bailey, *The Poetry of Thomas Hardy: A Handbook and Commentary* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1970), p.318.